

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

2021社内報アワード
ブロンズ賞
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
281
Dec.2021

特集

キリスト教教育が示すもの

聖学院SDGsコンテスト

PHOTO & MOVIE
受賞作品発表

関係団体の皆さんにインタビュー

支える人たち

女子聖学院中高守衛 佐藤 政美さん

巻頭座談会

聖学院大学と
女子聖学院中高の
チャプレンの先生による
トークセッション



特集

キリスト教教育が示すもの

& Seig
NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

No.
281
Dec.2021

CONTENTS

特集

01_ キリスト教教育が示すもの

聖学院大学と女子聖学院中高の
チャプレンの先生によるトークセッション

03_ &Talk

聖学院各校のキリスト教教育

07_ focus

07_ 生活の中に神さまを感じる
キリスト教保育
[聖学院みどり幼稚園]

08_ 礼拝を中心としたキリスト教教育
[聖学院幼稚園・小学校]

09_ 「聖書」の授業
[聖学院中学校・高等学校]

10_ 特別礼拝
[女子聖学院中学校・高等学校]

11_ キリスト教人間学
[聖学院大学]

12_ 聖学院SDGsコンテスト
PHOTO & MOVIE「探してみようSDGs」
受賞作品発表

13_ Seig NEWS

関係団体の皆さんにインタビュー

16_ **支える人たち** [佐藤政美さん]

17_ 2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

120年の轍を歩む

19_ **聖学院歴史探訪** —ミッションの意味—
[EPISODE #15]

聖学院ニューズレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。
アンケートに回答いただいた方の中から抽選
で10名様に「聖学院オリジナルキーホルダー」
をプレゼント!




- 有効回答期間
2021年12月16日～2022年2月28日
- 当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編集/学校法人聖学院 広報センター
デザイン/株式会社キュー・ジー
発行日/2021年12月16日



日本のミッションスクールの多くは、海外からの宣教師によってキリスト教の伝道と教育のために始められました。時代と共に教育の形は変わり、教科教育、進路教育を重視する傾向が強くなってきています。聖学院も教科教育、進路教育に力を入れていますが、礼拝を第一にすることは創立以来変わらず、聖書の言葉を神の御言葉として伝えることを大事にしてきました。そこには120年にわたって守り続けるミッションスクールとしての姿勢があります。

今号では、聖学院が永年にわたり守ってきたミッションスクールの本質とも言えるキリスト教教育とはどういうものなのかをあらためて見つめ直し、聖学院全体を貫く「聖学院のキリスト教教育」の在り方を見ていきたいと思います。

気候変動や新型コロナウイルスの流行など、自分のことだけを考えている社会全体が成り立たない時代、言い換えれば「人に仕う」というスタンスがより必要になっている現代において、キリスト教学校で学ぶ意義について考察します。



& Talk

特集

キリスト教教育が示すもの

中学生、高校生、大学生は自己の存在について揺れ動く年代です。
クリスチャンか否かに関わらず
礼拝、聖書、ニーバーの言葉など、
キリスト教教育は生き方の1つの答えとして、
私たちを支え、光をもたらします。



柳田 洋夫

聖学院大学 大学チャプレン・人文学部教授。関心領域はキリスト教倫理学、日本キリスト教思想史。[翻訳]ラインホルド・ニーバー『人間の本性』『人間の運命』(高橋義文・柳田洋夫)、アリストター・E・マクグラス『歴史のイエスと信仰のキリスト』など。



高橋 恵一郎

女子聖学院中学校・高等学校チャプレン、宗教部長、聖書科主任。関心領域は子どもたちへの伝道。[著書]『聖書と子どもたち みことばを届けるために』(共著)、[翻訳]『プロテスタント教会の礼拝—その伝統と展開』(共訳)

聖学院はミッションスクールです。

礼拝と聖書の言葉をとても大切にしています。しかし生徒、学生の多くは礼拝という言葉や聖書は知っていても、聖学院に入るまでキリスト教が身近ではなかったかもしれません。一方「神を仰ぎ人に仕う」という建学の精神は、全学院を通じて在校生に非常に広く深く浸透しています。さらにはその保護者にまで、他者貢献の精神が培われている例も稀ではありません。

イメージしにくい反面、その精神は伝わっている聖学院のキリスト教教育。その本質について、聖学院大学のチャプレン、柳田洋夫先生と女子聖学院中学校・高等学校のチャプレン、高橋恵一郎先生にお話を伺いました。

生徒、家族、学院のため チャプレンの使命は祈ること

—チャプレンとは、学校においてどのような役割を担われていますか？

高橋 チャプレンはキリスト教教育を行なっている学校、キリスト教社会事業団体などに在籍している牧師で、日本基督教団の定義では教務教師に分類されます。その組織にいる方々が礼拝をささげられるように環境を整え、執りなす存在です。

柳田 高橋先生のおっしゃる通り、教会の外の場で働く牧師でしょうか。欧米由来ですが、元々は学校だけではなく軍隊や病院などで働く役

割だったようです。教会の外で礼拝や祈りを中心に働く。それを通じて、伝道、福音を宣べ伝える役割も担っていると思います。

高橋 またチャプレンの姿が生徒、教職員にとつてキリスト教のシンボルになるのではないかとも思っています。シンボルとは、目に見える物を通して目に見えない姿、形を指し示すものです。私たちの存在によって生徒たちが神様を意識することができるなら、これは重要な役割だと思っています。

以前PTAのキャンパに参加した時、学校の先生に「高橋先生はいつも学院のために祈っていてくださいます」と紹介されたことがあります。とても印象的な言葉でした。もちろんチャプレンなので生徒のために祈るのですが、生徒だけではなく保護者や家庭、教職員や関係者のために祈ることこそチャプレンの仕事だと改めて教えられた気がします。それ以降、私はことあるごとに祈っています。生徒とすれ違ったときには、祝福の祈りをしています。

またクリスチャンファミリーの子どもたちを支えることもチャプレンの重要な役割です。この学校に赴任したときのクリスチャンファミリーは、5%ほどでした。10年ほど前は約7%で、先日調査をしたら10%に上がっています。日本ではクリスチャンの総数が減っている中、校内では10%のご家庭がクリスチャンのファミリーであると

いう事実は、とても大きな意味をもちます。私たちに期待されているものも大きいように思います。

一方、クリスチャンファミリーの子どもたちが教会につながりにくくなっているような状況もあります。信仰から離れたり、場合によっては教会に行っていないことを公言できない生徒もいます。そうした子どもたちを支えて応援していくのも重要な役割で、見えない形でチャプレンの仕事です。

柳田 祝福という言葉には私も感じる場所があります。キリスト教の学校なので、卒業式は礼拝形式で行います。式が終わった後、普段は全くキリスト教に関心のなさそうな卒業生に「先生、私のために祈ってください」と言われたことがあります。その言葉を聞いて、私も自分の存在を知らされた気がして、喜んでその場で祝福をしました。

問うことを通して 問われていることに気づく

—キリスト教教育としては、具体的にはどのような授業をされていますか？

高橋 ミッションスクールによって違うと思いますが、私たちの学校の場合は、聖書からの学びが中心です。中学1年生はキリスト教の基礎的な内容と聖学院の歴史についてを学びます。中学2年生、3年生は新約聖書を読みます。そして高校1年

神よ

変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、
それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。

そして、
変えることのできるものと、
変えることのできないものとを、
識別する知恵を与えたまえ。

ラインホルド・ニーバー〔アメリカの神学者・政治哲学者
(1892-1971)〕の祈り(大木英夫訳)



生、2年生は旧約聖書を読み、高校3年生は自分の生き方を、聖書を通じて考える授業をしています。全学年が聖書に基づく授業です。

以前は教会史などの別の要素も加えていました。しかし、触れてほしいのは歴史ではなく、聖書を通して語りかけてくださる神様の言葉です。生徒の多くがノンクリスチャンという事実が踏まえつつ、そのことを意識しすぎずに十字架のことや罪のあがないについてしっかり語っています。生徒は一生懸命勉強して吸収してくれているのではないかと思います。

先日、生徒たちに受洗の調査をしました。「あなたは受洗を過去に考えたことがありますか? あるいは将来、洗礼を受けると思いますか? 全然考えていませんか?」という3択の質問です。私の予想では「全然考えていません」という回答がほとんどだろうと思っていました。ところが相当の数の生徒(101人、生徒全体の15.4%)が「受洗を過去に考えたことがある」「あるいは将来、洗礼を受けるかもしれない」というところに印をつけていました。これには驚きました。以前あるグループが渋谷や池袋で30〜50人ぐらいを対象に同様の調査をしたところ、受洗を考えたことがある人は0でした。聖書の言葉や讃美歌に触れることで、最初は遠い存在だったかもしれない信仰が、生徒の中に生徒なりの形で流れているのではないかと思ってい

ます。

柳田 大学のカリキュラムにはキリスト教教育に関連する科目が多数あり、様々な学問と相関性をもって学ぶ形になっています。1年生には基礎的なことを学ぶ「キリスト教概論」があり、2年生になると「キリスト教と文学」「キリスト教と音楽」「日本キリスト教史」などを学びます。3年生からは学部に沿った専門的な科目になり、政治経済学部には「キリスト教社会学」、人文学部には「キリスト教文化論」、心理福祉学部には「キリスト教人間学」があります。

大学も多くの学生がノンクリスチャンです。また、学生は学問を学びにきているということ踏まえ、宗教学や一般論的な角度から話をする必要があります。ただ、そういう時は学生の反応があまりよくありません。後からアンケートを見ると、一般論ではなくキリスト教の話の話を聞きたいという声が多いんですね。学生は、知的な満足だけではなく、自分の生き方、在り方に力強く語りかけてくる何かを求めているのかもしれない。

聖学院大学の一つの大事な学問としてラインホルド・ニーバーの研究があります。ニーバーの祈りの中に「変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。」という有名な言葉が

あります。また「人間というのは自分の体も含めて自然の中に巻き込まれていながら、それを超える精神を持つ存在だ」というテーゼがあります。これらを授業で紹介したところ、学生から「響きました」といういくつかの感想が寄せられました。そういう学生の反応を見るにつけ、人間は目に見える物の中に生きていながら目に見えない物を仰ぎ見ずにはいられない存在なのかもしれないと思います。

人間は、自分の生き方、在り方というものを常にどこかで問うていると思います。直接問わないにしても「何で今日上手くないんだらう」という小さな疑問も、自分の生き方、在り方にながっている問いだと思えます。近代以降は、そういう問いに対しても個人主義的な傾向が強くなり、人は自分の中で解決しようとしています。しかしキリスト教は、ともすれば内側に閉塞しがちな個人というものに對し、外から強力に光と力と導きを与えてくれます。

人間の実存的な問いに答える側面がある一方、キリスト教が私たちに問いかけてくる側面もあります。私たちは様々なことを神様に問いかけたくなります。祈りで一生懸命に問いかけることも、自分の思いを注ぎ出すこともよいでしょう。しかしその前に、まず神様から問いかけてられている存在なんだとも思います。聖書には、言いつけに背いて隠れているアダムとエバに對し神様が「どこにいるのか」と問うとこ

ろがあります。「あなたは今どこにいるのか？」という根源的な問いです。そこから我々の生き方、在り方への問いも始まるというのが、事柄の本質だと思います。

聖学院の「DNA」を受け継がれる建学の精神

——聖学院は他者貢献の精神が生徒、学生に根付いています。キリスト教教育の影響と言えるのではないのでしょうか？

高橋 聖学院は牧師を養成する神学校から始まったというルーツがあり、これは非常に大きなDNAではないかと思えます。宣教師、牧師を育てるということは、聖書を学び、礼拝する者を育てるということになります。礼拝をする者、聖書を読む者というのは自己完結せず、自然と視野が広がっていきます。東日本大震災の時にも生徒たちに釜石でのボランティア活動と呼びかけたら、有志で参加者が集まってくれました。新型コロナウイルスで中断するまで、その活動は継続されてきました。あえて続けようとしたというより、生徒たちにとっては継続することが当然のことだったようです。

柳田 釜石でのボランティア活動に関しては大学も同じです。やはり新型コロナウイルスで今は活動できていませんが、それまでずっと釜石に関わり続けてきました。他者のために生きると

いう精神は、元々聖学院にあったと思いますし、それはやはり大事にしていきたいと思えます。

そもそも、聖学院の祖とされるガルスト宣教師(※)自身、秋田において、布教活動と併せて地域を助ける活動や社会貢献をしていました。他者、社会への奉仕の精神が、建学の祖とされる人物の中にすでにあつたことも、現代まで脈々と続いてきた要因ではないかと思えます。

——柳田先生は研究においても建学の精神を意識されていますか？

柳田 それは私も常に念頭に置いています。ニーバーは、一方では難しい神学、哲学を展開していますが、他方では大多数の幸福やそのための社会の仕組みなどを追求しています。若い頃は労働運動にも関わっていました。ガルストに負けず劣らず、他者や社会のために尽くす人で、まさに「神を仰ぎ人に仕う」という精神の持ち主です。私もニーバー研究を通じて建学の精神を伝えていきたいと思っていますし、できると思っています。だから研究と建学の精神は、私の中ではいつも触れ合っています。

分裂や対立が深まる今、キリスト教教育が示すもの

——キリスト教教育を通じて、生徒、学生に自己実現してほしいことはなん

ですか？

柳田 ワクチンを打つ打たないなどをはじめ、新型コロナウイルスによって、いろいろな意味での分断や対立が表面化してきていると思います。誰しも感情的になりやすく、何が正解で何が正義なのも見失いがちです。これからはますます自己中心的な生き方や考え方が公然と語られるようになっていくのではないのでしょうか。自己責任という言葉もその一例です。そのような中、最近大学では一つの教育目標として「良き隣人となる」ということが強調されるようになりました。シンプルですが非常に大事なことだと思います。自分のためにだけ生きていく限り誰も幸せにはなれません。学生には一生覚えておいてほしい言葉です。

高橋 女子聖学院中高にはクローソンホールの前と中庭に、祈りの姿勢を保持してぬかづく少女の像があります。

1961年の秋に高校2年生の生徒が作った作品です。この少女の像は、私たちが目指す生徒のあるべき姿を表していると思えます。

柳田先生がおっしゃったように今の社会においては、分断が深刻化してきていると思います。他者の罪を指摘しがちです。しかし人は皆、神の前に罪人です。もう一度この出発点に立ち返ることで許しと融和が生まれるのではないのでしょうか。ぬかづく少女の像はまさにその象徴です。神の前にぬかづいて、神の御心を求め従い生きていく、生徒にはそういう人になってほしいと思っています。

(取材日/2021年10月)

※チャールズ・E・ガルスト 聖学院の祖とされ、スミス夫妻と共に、伝道が業な大都市ではなく、あえて秋田から伝道をはじめました。伝道の中、栄養不足の子どもたちが多いことを知り、早くから乳牛を飼うなど、人や地域のために尽力した宣教師です。



聖学院大学全学礼拝の様子。2021年度は感染対策をとりながら対面礼拝とオンラインでの文書配信を行なっている。



クローソンホール前、「祈る少女(おとめ)の像」1961年当時高校2年生の生徒による作品。



お昼ご飯の前にお祈りをする園児たち。日常の中で神さまを身近に感じています。

生活の中に神さまを感じるキリスト教保育※

※幼稚園では教育と養護が一体となっているためキリスト教教育ではなくキリスト教保育という呼称になります。

神さまから愛されているという実感が絶対的な自己肯定感につながる

10代の子どもなら神さまへの高度な理解ができるかもしれませんが、幼稚園では概念で神さまについて教えるのは困難です。生活や遊びを通して聖書の御言葉を経験していくことが重要になります。そのため聖学院みどり幼稚園(以下みどり幼稚園)では、お祈りの時間だけではなく、日常の中にキリスト教保育がちりばめられています。自然やお友だちや先生との関わりにおいても聖書の物語が出てきます。例えば園庭の木々の変化についても葉っぱがきれいに色づくように神さまが作ってくださったんだよ」と天地創造に基づく話を織り交ぜて話します。そして体験を通して、園児たちが「自分は神さまに愛されている存在なんだ」と実感できることを目指しています。特別なことをするのはなく、日々の体験から気づきを獲得する。それがみどり幼稚園のキリスト教保育です。

みどり幼稚園には週1回、保護者も含めてみんなで礼拝をする全園礼拝があります。今は新型コロナウイルスの影響で定期的な開催が難しくなっていますが、全園礼拝を通して、保護者にも神さまの愛を伝える機会を設けています。

チャプレンでもある園長の赤田直樹先生は、神さまの愛が絶対的な自己肯定感につながると言います。「神さまの愛は無条件の承認です。そういう体験を土台にすると心の中に根拠のない自信が育まれます。根拠のない自信は何に依って立つものでもないため失われることがありません。子どもたちには、そういう強

「日本一の園舎を作る!」赤田園長の夢

みどり幼稚園は園舎の老朽化で建て替える必要のある状況です。一方隣接する土地を寄付していただいたので広い園舎を作ることも可能です。赤田園長は「せっかく建て替えるなら」と日本一の園舎を作ることを考えているそうです。「園舎のアイデアを教職員、子どもたち、保護者、聖学院大学の児童学科などから募集し一緒に実現していきたいです。また私の夢を通して、子どもたちに挑戦する姿を見せたいです」と赤田園長は語ります。



赤田直樹園長・チャプレン

母方の祖父も父も、聖学院を作ったディサイプルス派から枝分かれした「キリストの教会」の牧師。ディサイプルス派のおかげで自分が生を受けたと、ディサイプルス派が作った聖学院に恩を感じている。自称「日本一の聖学院好き」。日本一の園舎も恩返しの一環として計画中。

い自信をもって、夢に向かって挑戦してほしいです。」

社会は今、目まぐるしく変化し、AIにより人間の仕事の形も変化しつつあります。一説によれば、今の園児たちが大人になる頃には現時点では存在しない職業が生まれ、想像もしないスキルが必要になっていとも言うわれています。そんな未来で問われるのは「自分ならできる」という根拠のない自信ではないでしょうか。

みどり幼稚園には、遠方からわざわざ通っている園児たちもいます。近所だから遠方だからとの理由ではなく、明確な理由をもって選ばれている幼稚園です。みどり幼稚園が選ばれる理由の一端を、キリスト教保育が担っているのかもしれない。

聖学院小学校・幼稚園

礼拝を中心としたキリスト教教育

御言葉を通してイエス様に出会うことで、
全人的に成長する



毎朝の礼拝でお祈りする子どもたち。(2020年2月に撮影)

聖学院小学校・幼稚園ともに、聖書の御言葉が指し示すキリスト教的な価値がキリスト教教育の中心にあります。それにより子どもたちの心も精神も人格も全てを培っていきます。その御言葉に出会う場が礼拝です。

礼拝は週5日行われ、子どもたちは聖書の話を聞き、讃美歌を歌い、主への祈りを捧げます。また毎日、聖句暗唱(御言葉を覚えて暗唱すること)をしています。聖句は月ごとに決められていて、子どもたちは何も見なくても聖句を言えるようになります。「御言葉に出会うということは神の言葉であられるイエス様に出会うことです。御言葉を自分の心にとどめイエス様の愛の教えに従うことでイエス様が共にいて出会う導いてくださいます。イエス様は人のあるべき姿のお手本です。イエス様と出会うことで全人的成長が促されます」と聖学院小学校・幼稚園の中村謙一チャプレン。

幼稚園も小学校も時には子どもたちと教員のぶつかり合いの中で人格が共に成長していきます。中村チャプレンは、ぶつかり合いの只中でのメタノイア(悔い改め)が成長に必要だと言います。「そもそも人間は失敗から悔い改めて成長するように神様に造られています。悔い改めるとは心を変えることです」。地域の教会の毎週の礼拝から聖学院幼稚園と小学校に遣わされたクリスチャンの教員たちの祈りと教職員全ての献身的な奉仕が教育のみ業に起

こるメタノイアの成長を日々促していきます。

聖学院小学校ではクラスメイトが筆箱を落とすと、すぐにみんな集まってきて拾い集めてくれるそうです。困っている子がいると、知らん顔をせず、子どもたちは自然と助け合つたことです。中村チャプレンは「聖学院のキリスト教教育は聖書の中で一番大切なイエス様の愛の教えである『神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい』という御言葉によって支えられています。そしてこの御言葉こそは聖学院全体の建学の精神である『神を仰ぎ 人に仕つ』の基盤となっています。」と言います。イエス様の愛の教えというキリスト教的価値は、幼稚園、小学校で子どもたちの人格を形成し思いやりのある心を育てています。



中村謙一チャプレン

PTA宗教部のPTA聖書研究会

聖学院小学校・幼稚園には、子どもたちだけではなく保護者も聖書の御言葉にふれる機会があります。それがPTA聖書研究会です。月に1回、地域の教会の牧師や法人内の教務教師の先生から聖書のお話を聞き、礼拝をします。皆さん熱心に活動されています。また奉仕活動も盛んで、積極的に聖学院フェア、感謝祭のカレーパーティの準備・運営に携わってくれるそうです。「聖書の御言葉にふれ、御言葉が指し示すキリスト教的な価値が保護者の人格へ良い影響を与えた結果だと思えます」と中村チャプレン。卒業した子どもたちの保護者に、聖学院小学校・幼稚園でよかったと思うことを聞くと、キリスト教的な奉仕の精神と答える方が多いそうです。



「聖書」の授業

聖書と照らし合わせながら
自分の考え方の基準を作っていく



実際に起きた事件も題材に取り入れ、命について考える授業。生徒も真剣に取り組んでいます。

聖学院中高には「聖書」という授業があります。聖書を中心にキリスト教についての知識や価値観を学ぶ授業です。特徴的なのは、問いを立て、生徒が主体的に考えることを重視している点です。例えば「愛するとはどういうことですか？」「奉仕とはどういうことですか？」という問いが生徒に投げかけられます。その問いに対する自分なりの答えを聖書と照らし合わせながら考えていく授業です。

特に高校3年生になると6年間の総まとめとしてキリスト教倫理について考える授業が展開されます。2学期は「命」をテーマとし、モーセの十戒から「殺してはならない」という人としての根源に関わる題材を扱います。授業では、まず「殺人が法律で禁止されているのはなぜか？」という問いが投げかけられます。その問いへの応答はICTを活用して、Googleフォームで集計されます。続々と集まってくる回答には「力のある人が国を支配してしまうから」「社会的秩序維持のため」「人間の命は無限の価値をもっているから」など、しっかりと考えられた答えがいくつも見られます。次に聖書は人の命について「絶対的に大切なもの」という観点から書かれていて、疑問を挟む余地すらないことを解説します。さらに公共の利益を理由に犯行に及んだ凶悪事件や優生思想などについても話し、様々な角度から神によって与えられた「One」である「命」の大切さについて考

察していきます。最初は和やかに授業を受けていた生徒たちも、次第に真剣な面持ちに変わっていきます。

授業で紹介された凶悪事件の犯人は正義だと思つて殺人を犯しています。殺してはいけないという共通認識の崩壊ともいえます。このような事件に直面したとき、自分なりの答えを持っていないと毅然と「間違っている」と言えません。自分なりの考え方や価値観、つまり基準が重要です。授業を担当する久保哲哉チャプレンは「聖書は規範する規範と言われます。聖書の考え方、規範に触れることで、『自分はどう考えるか』という自分なりの考え方が見えてきます。

この授業を通して、自分の基準の作り方を生徒に身につけてほしい」と語ります。



久保哲哉チャプレン

グローバルイノベーションクラスの宗教ゼミ

世界に貢献できるイノベーターを育成するグローバルイノベーションクラス。このクラスには「宗教／文化」というプロジェクトがあります。聖書の思考、発想をもちいて社会で活躍している人を取材・研究して、聖書の原理がどのように社会で機能しているのかを知るプロジェクトです。聖書に基づいた理念で企業を立て直した資生堂の元社長の本を題材にしたり、世界中に聖書を届けるために辞書すらない言語での翻訳を手掛けている団体に来ていただいたりしています。世界で活躍する生徒を育てるにあたり、キリスト教的視点を持ち合わせている、聖学院らしいゼミです。



特別礼拝

説教(メッセージ)や賛美で
神様を感じることが生徒に希望を与える



秋の特別礼拝の様子。ゴスペルシンガーの林賛美先生の歌に涙する教員もいました。

10月11日(月)～14日(木)の4日間、女子聖学院中高では特別礼拝が実施されました。特別礼拝は、春と秋の年2回、外部の牧師やゴスペルシンガー、クリスマスチャン音楽家などを招いて説教や賛美をしていただく女子聖学院中高の伝統的な礼拝行事です。本来はチャペルに生徒が集合して行われていたのですが、新型コロナウイルス感染防止のため、現在は教室でチャペルからの配信動画を見る形式になっています。

今年の秋の特別礼拝は久遠キリスト教会牧師の三浦真信先生と、東京メトロチャーチで伝道師をされているゴスペルシンガーの林賛美先生にいらしていただきました。三浦先生はご自身の経験に基づき聖書の言葉と出会うことで救われた話を、林先生は現代の若者の課題や日常を題材にした賛美をしてくださいました。礼拝の中で林先生は「おかあさん」という、援助交際をしている女子高生を題材にした曲を歌われました。林先生は、女子高生がテレビのインタビュで「好きでやっているわけではなく、お母さんに振り向いてほしかった」と言っていたのを聞いてこの曲を作られたそうです。曲中、少女の母親への思いが繰り返し綴られています。J-pop調のゴスペルで、その言葉一つひとつが自然と入ってきて胸に迫ります。涙を我慢する生徒もいましたし、実際、泣いている教員もいました。「子どもは親と手をつないでいればどんな所にも行くことがで

きます。信仰とは見えない保護者がいるということ。生徒たちは、成績や家庭、将来、人間関係等それぞれ様々な課題を抱えています。そんな生徒が、あなたはここにいていいんだよ、という言葉を通して聞いたら、どんなことでも乗り越えていけるのではないのでしょうか。それが『神を仰ぐ』ということだと思えます。」と特別礼拝を担当されている高橋恵一郎チャプレン(4ページに同じ)は語られます。

特別礼拝は生徒に福音を伝え、信仰の喜びを味わってもらうことを目的として始められました。その思いは今でも変わりません。教育を通じての伝道を重視した初代校長、バーサ・F・クローン先生の信仰が脈々と受け継がれている行事です。



高橋恵一郎チャプレン

宗教委員会

女子聖学院中高の生徒会には「宗教委員会」が置かれています。各クラスから選ばれた宗教委員が、毎日の礼拝や季節ごとの宗教行事、ボランティア活動の取りまとめなどを行っています。中学、高校それぞれに宗教委員長、副委員長が選出され、キリスト教活動のリーダーとして活躍しています。宗教委員として

選ばれた生徒は、礼拝や式典で聖書のことばを朗読することをとても楽しみに、また誇りに思っています。今年のクリスマスツリー点火式でも、礼拝の中でクリスマスに関連する聖書箇所を、宗教委員が朗読しました。



キリスト教人間学

キリスト教教育を通じて

人生の指針となり得る価値観に触れる



心理福祉学部の必修科目「キリスト教人間学」。多くの学生が講義に耳を傾けています。

「キリストが、『汝の敵を好きになれ』と彼(キリスト)がいい給わなかったのは、われわれの幸いとするところであろう」。聖学院大学は学部ごとの固有性を持ったキリスト教関連の必修科目があります。心理福祉学部には「キリスト教人間学」という授業があり、冒頭の一文は「平和の倫理」というテーマで行われた授業で紹介されたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア(以下キング牧師)の言葉です。

今回の授業では、平和とは何かをキリスト教の視点から考察する内容で、平和の定義がイエス・キリストの出現でどう変わったか(旧約聖書と新約聖書の違い)、イエス・キリストの唱えた平和とは何かを講義しました。旧約聖書では過度な報復を防ぐ目的で、同害報復(※が認められています)が、イエス・キリストは復讐の連鎖を断ち切るため、復讐そのものを禁止しました。それが「汝の敵を愛せ」という言葉です。この言葉は同時に「愛敵の姿勢をもって抵抗すること」とも意味し、あらゆる暴力が許されないというメッセージを敵に示すことも意味しています。授業を担当されている五十嵐成見いからなるみチャブレンは「武力によらない戦いによって勝ち取られる平和です」と解説しています。

この非暴力主義的抵抗の実践としてキング牧師の公民権運動が紹介されました。興味深いのはキング牧師が「汝の敵を愛せ」という言葉について「敵への愛は神の命令であり、神の要請に従おう」という意思が大切」と説明したという話です。つまり感情としては「好き」になれなくても良い、相手を受け入れ認めようとする意思を持ち続けることが大事であるということです。そしてその意思の支えとして信仰の必要性を説いています。この説明においてキング牧師の冒頭の言葉が紹介されました。

この言葉は、意思を持ち続けるという努力そのものを肯定しています。そこに光があるのではないかと思います。それは平和に限らずありとあらゆる困難へ立ち向かう勇氣にもつながります。学生は、聖学院大学のキリスト教教育を通してキリスト教の価値観に触れ、その後の人生の指針となりうるような学びや気づきを得ているように思います。最後に五十嵐チャブレンは「キリスト教を通して、学生が深く社会について考えるきっかけになれば」と思っています」と語っていました。

※同一の加害によって報復を行う刑罰



五十嵐成見チャブレン

「キリスト教概論」

聖学院大学には「キリスト教概論」という必修科目があります。新型コロナウイルス以前は、教会に見学に行ってレポートを提出する課題がありました。教会に行ったことをきっかけに良い出会いがあり洗礼を受けた学生もいるそうです。五十嵐チャブレンは「キリスト教学校の講義は伝道の可能性をもって改めて実感しました。講義がすぐに信仰に結びつかなくても、社会に出てから教会に興味をもつことにつながります」と言います。

聖学院SDGsコンテスト

PHOTO & MOVIE

「探してみようSDGs」

受賞作品発表

学校法人聖学院が主催する聖学院SDGsコンテストPHOTO&MOVIE。

写真や動画を通して、私たちの身近にあるものからSDGsにつながる何かを見つけてほしいという主旨で開催されました。

第2回目となる今回は、写真・動画合わせて102作品の応募をいただきました。

その中から審査によって選ばれた8作品をご紹介します。

(Webにて各作品の作品概要・審査員講評なども公開しています。右のQRコードからご確認いただけます。)

SDGsコンテスト概要

- 応募期間 2021年9月15日～10月20日
- 応募方法 2021聖学院ウェブサイトSDGsコンテスト応募専用フォーム
- 受賞種別 最優秀賞(1名)／優秀賞(2名)／佳作(4名)／特別賞
- 応募対象 聖学院で学んでいる方々・卒業生・保護者・受験生・教職員・聖学院関係者
- 審査員 石原康男(フォトグラファー)、武本花奈(フォトグラファー)、佐藤慎(広報センター長)、聖学院広報センター



【優秀賞】
ぜんぶ食べる！
S. K さん



飽食の時代、日本人は平均で1日にお茶碗一杯分の食事を残して捨てているそうです。日本全体では莫大な量になります。世界中には食べられない人もたくさんいます。ちいさなことだけれど毎日お皿をピカピカにできたらと思います。



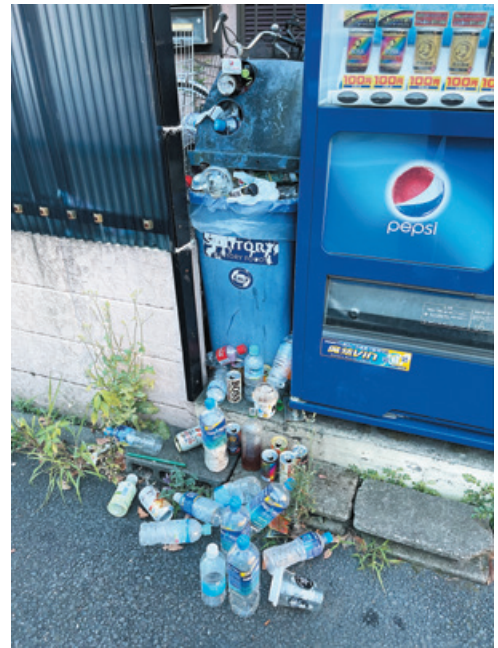
【優秀賞】
違いを認め合うこそ
鈴木 詩衣菜 さん



一面黄色のコスモス畑に数輪の桃色のコスモスが凛と咲いていました。男女平等を実現するにはまだまだ課題は沢山ありますが、すべての女性がこの桃色のコスモスのように、まっすぐに、のびのびと自分の意見を発信し、より良い政治や経済や社会のなかで活躍できる日がくることを願います。



【最優秀賞】
自分ごとにしよう
西 大河 さん



街中のゴミ箱、みんなが心地よく使うためにあるのに溢れ返ってしまっているのが現実…。みんな自分ごと化して、街を綺麗にしよう。ものを買う責任、使う責任、捨てる責任をちゃんと持ちましょう。自分だけではなく、他者そして社会のために。



【広報センター長賞】
大島の「ろっぼうやき」
～味の共有が「つながり」に
松崎 綾子 さん



【佳作】
トイレが「楽しい」の意味
増田 祐二 さん



【佳作】
小さな友達
坂巻 真知子 さん



【佳作】
海はゴミ箱？
生田 直子 さん



【佳作】
“好き”から始めるSDGs
(動画)
新井 乾斗 さん

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



創立記念講演会

1517年10月31日、修道士マルティン・ルターが当時の教会に対し「95カ条の提題」を提出したことを契機として、プロテスタント教会が始まりました。聖学院大学は、プロテスタント大学として、この10月31日を創立記念日と定め、毎年10月下旬に講演会や音楽会を行っています。今年度は聖学院大学創立以来教鞭を執られてきた土方透教授より、「世界社会の祈り-《聖学院を身につける》-」との題で講演いただきました。私たち一人ひとりの存在が祈りにおいて神と人々(社会)に結びついていること、またその契機を自覚することの大切さを覚える時となりました。



聖学院大学出版会

新刊紹介

『安全性とリスク：
正しく認識し、正しく問うために』

標宣男(聖学院大学名誉教授)著『安全性とリスク:正しく認識し、正しく問うために』が12月に発刊されました。極度に専門化した現代科学技術社会において、一般人はどのように「専門家の領域」と付き合っていけばよいのか。科学技術の持つ「リスク」を社会的にどのように認知すればよいのか、また、その科学技術を社会的に許容すべきかどうかについて考える重要な手掛かりを与えてくれる一書となっています。



聖学院キリスト教センター



召天者記念礼拝

日本基督教団では11月の第一聖日を「聖徒の日」と定め、この日に逝去者(召天者)の記念礼拝を行います。天に召された信仰の先達を偲び、その信仰の志を受け継いでいくことを確認します。聖学院大学でも11月10日(水)に全学礼拝において召天者記念礼拝を守りました。特にキリスト教の伝道と大学の発展に深く関わられた西村虔先生と高橋義文先生のお二人を覚えて、祈りが捧げられました。





ワークショップ「シン・カタリバ」で 本音を語る

高1の学年行事として例年実施している「カタリバ」。今年は10月16日(土)に、聖学院の卒業生19名を迎え、「シン・カタリバ」として開催しました。カタリバは少し年上の先輩と対話することにより高校生の心に「火を灯す」ワークショップですが、哲学対話を用いてより自分を深め、仲間同士思いを聞き合い、将来の進路を切り拓ききっかけの時間となりました。



GIC プロジェクトウィーク 中間発表会を開催



10月29日(金)、30日(土)、高校グローバル・イノベーション・クラス(GIC)の独自科目の成果と進捗を報告する中間発表会を開催しました。GICがスタートしてまだ半年ですが、自分たちの研究や活動の報告、事業プランなどをピッチプレゼンとポスタープレゼンで生き生きと語ってくれました。29日は聖学院中高、30日はCIC TOKYO(虎ノ門ヒルズビジネスタワー)を会場として、生徒の保護者などを対象として発表がなされました。



コロナ禍のボディパーカッションコンクール

10月30日(土)、合唱コンクールの代替企画として「ボディパーカッションコンクール」が行われました。主催した生徒会は「クラスの仲間で協力し成長できる女子聖文化を中学生にも体験して欲しい」という願いを込めて企画しました。特別審査員にお迎えした打楽器奏者の大橋エリさんは「どのクラスもクリエイティブで素晴らしいパフォーマンスでした」と講評してくださいました。チャペルの舞台上で生き生きと表現する生徒の姿に感動をもらうことができました。



東京女子大学と 「高大連携協定」を結びました

9月9日(木)「高大連携協定」締結のため調印式が行われました。両校には創立者バーサ・F・クローソン先生が東京女子大の創立促進委員会のメンバーを務められていたなど、古くから深い関わりがあります。今後は指定校枠が大幅に拡大される他、教育連携も活発になっていきます。



東京女子大に進学した卒業生の記事はこちらから(pdfダウンロード)



聖学院小学校



滝野川警察署監修 交通ルールと警察のお仕事を学ぶ特別授業を開催

10月28日(木)、今年も滝野川警察署の協力のもと1年生交通安全教室が行われました。昨年から感染予防のためオンラインで実施していますが、今年は地下のチャペルと1年生教室を結んで配信する形での開催となりました。おまわりさんとピーポくんが、横断歩道の渡り方や自転車のルールなど丁寧にわかりやすく、そして楽しく教えてくださいました。また、滝野川警察署の方々は3年生の社会の授業「警察のお仕事」にもご参加いただきました。子どもたちが用意していたたくさんの個性豊かな質問の一つひとつ丁寧に答えてくださいました。どちらも警察の方に直接お話を伺うというとても貴重な学びのひとときとなりました。



聖学院みどり幼稚園

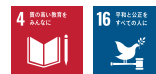


お父さんと遊ぼう会

幼稚園でお父さんと共に楽しい時間を過ごして欲しい、そんな思いから11月6日(土)にお父さんと遊ぼう会を行いました。園庭や園舎全体を使つてのオリエンテーリングです。手押し車やクイズ、じゃんけんなど、楽しく遊べるコーナーが全部で8か所用意され、1か所回るごとにシールが1つもらえます。子どもたちはお父さんと一緒に回り、とても嬉しそうにしていました。すべてのコーナーを回り、8つシールを集めたら、最後は年長組が作った看板の前で、親子で記念撮影です。お父さんと一緒に過ごせた楽しい時間は、子どもたちにとってかけがえのないものになったことでしょう。



聖学院幼稚園



祝・創立109周年 記念礼拝を守りました

10月27日(水)、幼稚園は創立109周年を迎え、子どもたちと創立記念礼拝を守りました。神様のお守りの中で、子どもたちが毎日元気に過ごせること、一緒に育ちあう時間を持てたことに感謝しました。年長組はハンドベルの奉献、年中組は讃美奉献でゴスペルソングを歌い、幼稚園の109歳のお誕生日をお祝いしました。2つのグループに分かれて縦割りでの礼拝でしたが、最後にはホールとお部屋にいる3つのクラスも合わせて、みんなで『ハッピーバースデー』を歌いました。礼拝後にはお部屋でお祝いのケーキをいただいて大満足の1日でした。



女子聖学院中高の
守衛さん



支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いを伺ってみました。

No.
02

株式会社プロテックス

佐藤政美 さん

前職は印刷会社。約20年前に警備員に転職する。研修を経て、最初に配属された勤務地が女子聖学院中高。以来、女子聖学院中高の正門を守っている。プライベートでは合唱団に所属し、主に教会音楽を歌っている。

「いつまでもここで働きたい」
私にとって聖学院はそういう職場です。

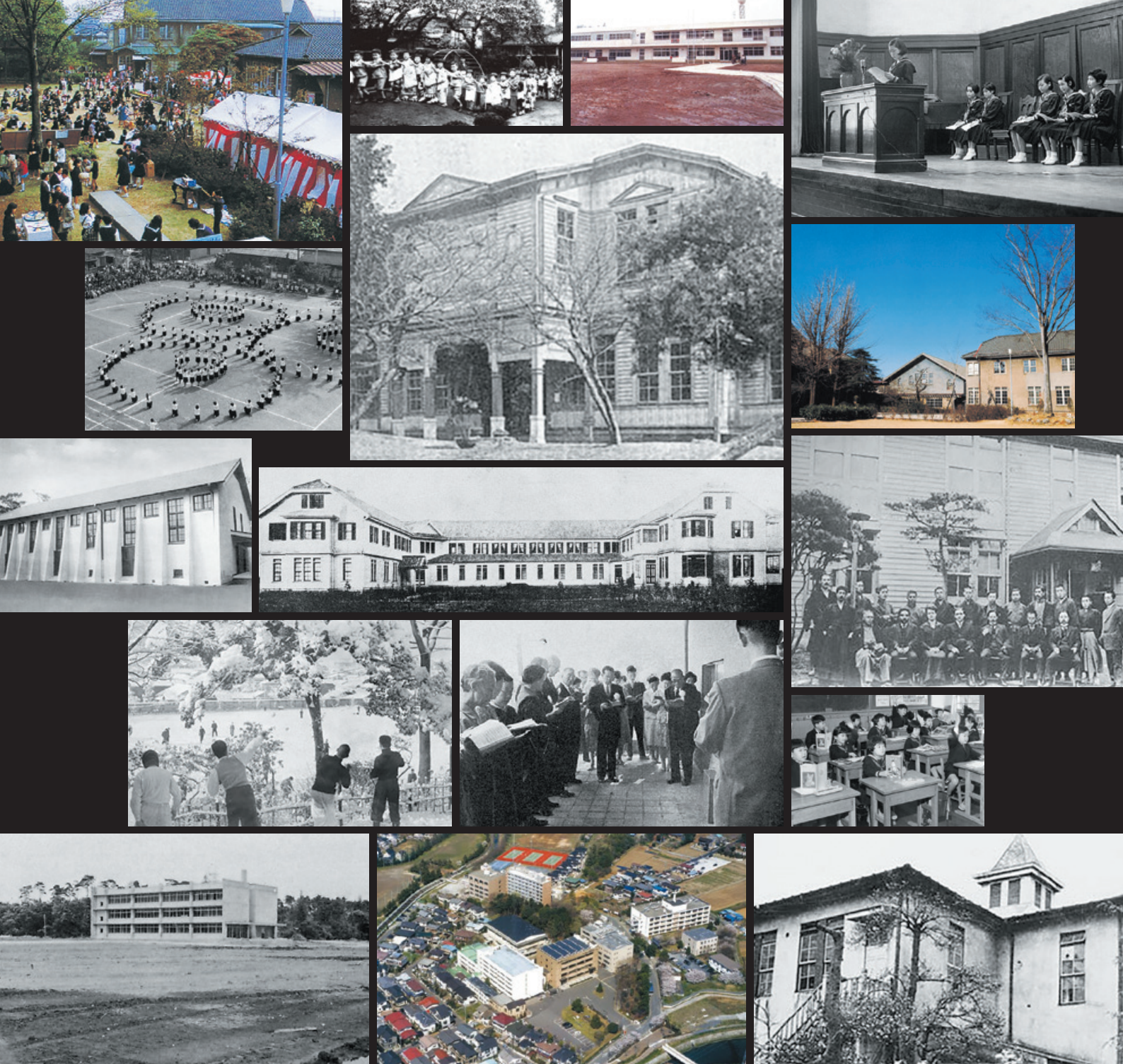
1月になると女子聖学院中高はホームページで受験生を応援するメッセージ企画を開催しています。1日1人ずつ様々な人が登場し、受験生にエールを送ります。その中に毎年選出されているのが守衛の佐藤政美さんです。佐藤さんは来年で勤続20年、毎日笑顔で生徒、教職員の方々を迎え、見送っています。その人柄ゆえみんなに親しまれ、このお話を伺っている時も守衛室の前を通る人がみな佐藤さんに声をかけていきました。長らく女子聖学院中高を見守ってきた佐藤さんに、お仕事の内容や、聖学院や生徒への思いを伺いました。

「守衛の主な業務内容は、正門における校内外警備および出入管理です。不審者から学校を守る役割がある一方、来校者が最初に会う学校の人間という側面もあります。自分の対応が学校の第一印象になるという自覚をもって和やかに接するよう心がけています。」

女子聖学院中高に配属になった時、生徒や教職員の皆さんがとても優しく、いい学校だなと思ったのを覚えています。挨拶はもちろん、気軽に話しかけてくれますし、垣根を感じさせない

「いつまでもここで働きたい」とい方たちはばかりです。誕生日が同じというきっかけで仲良くなった教員の方もいます。生徒の皆さんは素直な子が多いと感じています。挨拶をすればちゃんと返してくれますし、その積み重ねで会話も生まれます。それが仕事のやりがいにもつながっています。また短い会話の中からも見えてくるものがあり、頑張っている生徒は分かります。『頑張ってるね』と声をかけるくらいしかできませんが、そういう生徒を見ていると応援したくなります。」

佐藤さんの控えめな言葉の中に生徒への温かい眼差しが伺えます。通りがかった生徒に佐藤さんのことを聞くと「二人ひとりの名前をちゃんと覚えていて、声をかけてくれます。友達が先に帰ったかどうかも佐藤さんに聞けば分かります」と教えてくれました。約20年間、朝7時半から17時半までほぼ1人ずつと正門を守ってきた佐藤さん、「いつまでもここで働きたい」とおっしゃいます。女子聖学院中高には欠かせない守衛さんです。今日も佐藤さんの開門の音で女子聖学院中高の一日が始まります。



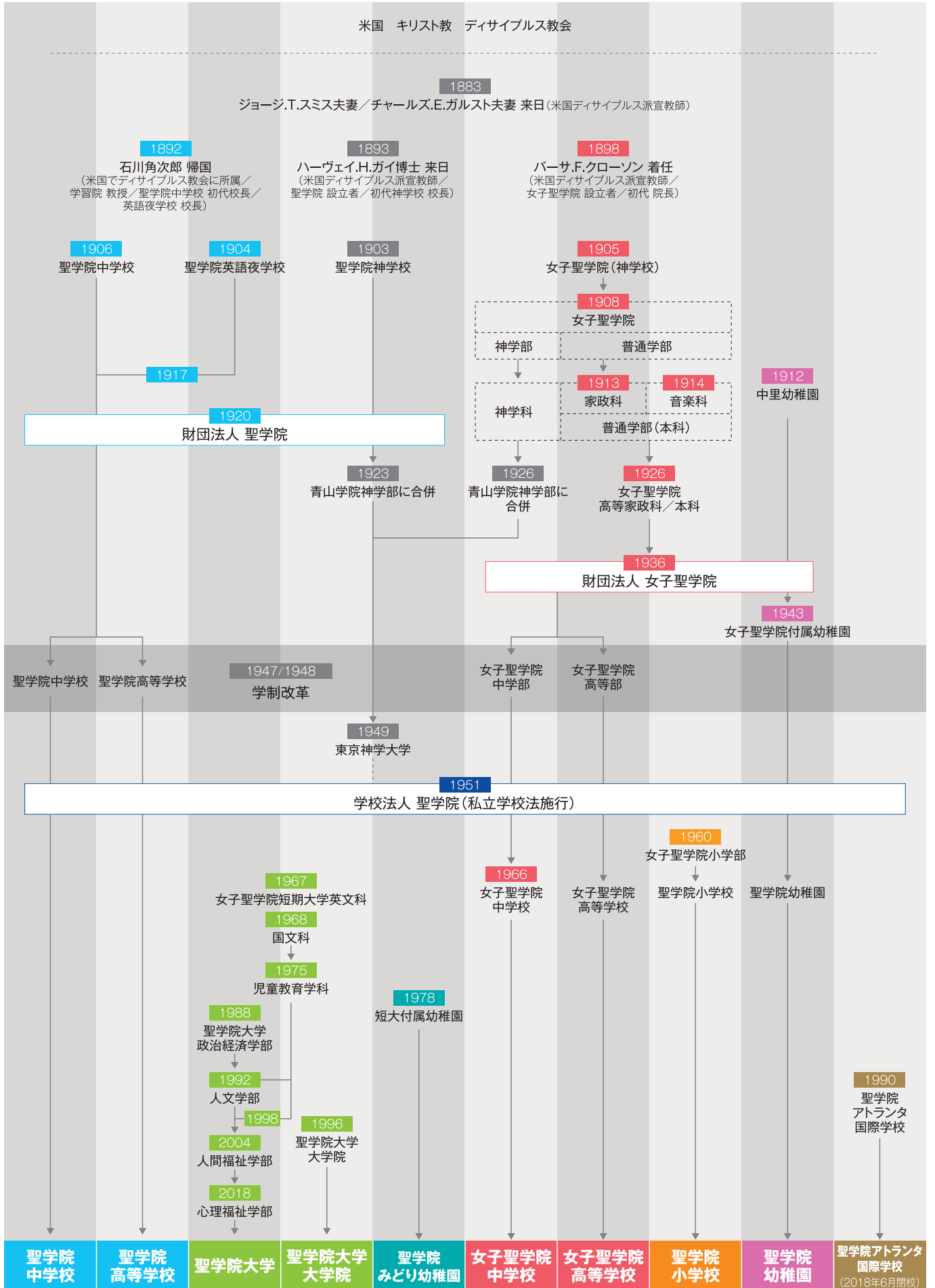
SEIGAKUIN 120th

2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

1903年に神学校として生まれた聖学院は、現在では幼稚園から大学院まで合わせ、約4,600名の園児・児童・生徒・学生が通う学校法人に成長しました。その時の流れの中、「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神は脈々と受け継がれ、人に、社会に、世界に貢献する人材を輩出し続けています。

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



聖学院歴史探訪

#15 聖学院教育の歴史

- ミッションの意味 -



かつてキリスト教の学校は、みなミッション・スクールと呼ばれましたが、聖学院の歴史もまたミッションの歴史であります。「ミッション」の原義は「^{ほんご}特別の任務による派遣」ということですが、キリスト教ではまず「伝道」そして「使命」という意味で使われます。聖学院の歴史は、まさしく伝道の歴史であり、^{すいこう}使命遂行の歴史でありました。

通常、外国からの宣教師を「ミッショナリー」と呼びますが、それは「キリスト教の福音伝道という使命を与えられた者」という意味です。聖学院の歴史も、まずこれら多くのミッショナリーによって始められ、そして支えられてきました。彼らは、この日本にキリストの愛と救いを宣べ伝えるために、はるばると海を渡り、それこそ命を投げ出してやってきたのです。そして、これらのミッショナリーに出会ってキリストを知り、日本人キリスト者として新たに使命を与えられた者たちがその事業を受け継ぎ、聖学院を発展させてきました。この項(次号以降)では、それらの先達が担ってきた「ミッション」の歴史を学んでいきたいと思います。

(次号に続く)

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版(出典より一部変更)

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード (VISA、MasterCard) をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月～金 9:00～17:30)

